

《2009年7月例会報告》

【日 時】2009年7月16日（木）19：15～21：30（その後「ルン」。最終組は2：00まで）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ】南アフリカ・コンフェデレーションズカップ報告

【報告者】田村修一（サッカージャーナリスト、アナリスト）

【参加者（会員）12名】阿部博一（日本サッカー史研究会） 井上俊也（会社員） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー） 金子正彦（会社員） 北原由（青梅FC） 国島栄市（ビバ！サッカー） 高橋義雄（筑波大学） 田中理恵（会社員） 田村修一（サッカージャーナリスト、アナリスト） 徳田仁（セリエ） 中塚義実（筑波大学附属高校） 本杉亀一（ビバ！サッカー）

【参加者（未会員）4名】★城所良江（DJ-SPORTS） 河野香織（会社員） 庄司悟（DJ-SPORTS）
★中元豪（DJ-SPORTS）

【報告書作成者】阿部博一

注1) ★は初回参加のため参加費無料

注2) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

南アフリカ・コンフェデレーションズカップ報告

田村修一（サッカージャーナリスト、アナリスト）

<目 次>

はじめに

1. 南アフリカという国
2. コンフェデレーションズカップ～ワールドカップの予行演習としての評価
3. コンフェデレーションズカップのサッカー～世界の動向
4. 日本の準備と可能性
5. ディスカッション

はじめに

高橋：今月の月例会を始めたいと思います。元々、理事の引き継ぎの時に徳田さんとディスカッションをする中で、コンフェデを観に行く人いるよねえという話から、じゃあ誰が観に行くのかというようなところで、ぜひ行って来た方から事情と様々な情報交換をさせていただければという趣旨で今回の月例会を開催させていただきました。私はずっと日本にいたんですけども、確か日本代表が南アフリカに出場が決まった週だったと思いますが、週刊誌が、日本のサポーターが集団犯罪に遭うだろうという2頁ぐらいの「犯罪王国へようこそ」みたいな記事が載っておりました。すでに週刊誌ではセンセーショナルに、いかに犯罪の多い国にとぼけた日本人が大挙して行くのかということが書かれていたことを思い出しました。ということで、本当にそうなのかを含めて、我々の、南アフリカ＝犯罪とか人種差別とかという、そんなイメージがいかに違うのかというところを聞かせていただければと思います。それでは、どうぞよろしくお願いします。

1. 南アフリカという国

田村：田村と申します。今年から会員とさせていただきます、知っている方もそうでない方もこちらにいらっしやいますが、よろしくお願ひします。実はすごく軽い気持ちでこの報告を引き受けました。僕ではなくて別の人がメインで報告をして、僕もその中に加わるのであればいいかなと思っただら、いつの間にか一人だけになってしまいました。

今回のコンフェデは、最初からフルカバーしようと思っていました。日本代表の予選突破はオーストラリア戦の前に決まるだろうと、だからオーストラリアは行かずに最初から南アフリカに行く決めて、大会を最初から最後まで観ました。これから話すのはその報告です。ここでの報告はいろいろな形になるのかも知れませんが、まず最初に言っておきたいのは、とりあえずここだけのものであるということ。外に対してのオフィシャルなものではないということが第一点です。それから第二点としては、あくまでも僕が観たというか、僕が行って経験して取材した範囲での話であることです。もちろんそれを皆さんにご参考になさっていただきたく話すのですが、あくまでも一つの立場からの意見や感想であって、それで例えば犯罪に巻き込まれたと言われても困ります。そこは最初からそういうつもりで聞いていただきたいと思ひます。

今伺ったところでは、来年は南アフリカに行かれる人が結構いらっしやるようです。皆さん南アフリカに行く、あるいは興味があるということだと思ひます。そこで話としては、南アフリカがどういふ国であるかということから始めて、コンフェデがどういふ大会の運営だったのか、来年のワールドカップまでに果たしてちゃんと準備が出来るのか、それから試合の分析です。実を言うとな回は、プレーのレベルについてはあまり期待していませんでしたが、思っていた以上に面白くて非常に見所のある大会だったと思ひます。そこで最後に、そうした世界のすう勢に対して、日本代表はどいふ課題があつて、どいふ準備をすればいいのか、ということをお話します。質問は後で受け付けますので、とりあえず話をします。

まず南アフリカは、今、高橋さんがおっしゃったように非常に情報が少ない国であると言えます。伝わって来ている情報にも偏りがあつて、非常に危ない国として伝えられている。実際僕もそう思っていました。行く前は、住んでいる人の二人に一人ぐらひはピストルを持っていて、何か事あるごとにすぐにピストルを出して、脅してお金を盗ったりすることが、町のあちこちで起っている国なのかなと、そのくらいに思っていました。だから、僕は普通海外に行く時にあまり旅行保険を掛けないのですが、今回だけは掛けて行こうと成田空港で掛けたのですけれども、保険会社が受けてくれるかどうか不安でした。そうしたら意外と簡単に受けてくれた。アフリカで掛けられない国は二つか三つありましたが、それがちょっと意外な国で名前は忘れてしまいました。ただ、南アに関しては、何の問題もなく保険は掛けられました。

それで実際に着いてみて、行く前に抱っていたイメージと全然違ふことに気付くわけです。さきほどのピストルだけでなく、普通の住民が護身用にハイエナを飼っている写真が YouTube で流れていたりして、本当なのかなと思っていました。それは現地の日本人駐在員に言わせると、どこかの劇団の人がパロディでそういった写真を撮ったらしいです。それが流れていて、他にも猿を護身用に飼っている写真があつたり、本当にすごい国だなと思っていたのですが、実際に行ってみるとそんなことはありませんでした。

一方で、トルシエは南アフリカに2回いたわけです。最初は1995年か96年だと思ひますが、カイザーチーフスというクラブの監督をやって、その後1998年のワールドカップで代表監督をやっていふます。そのトルシエは、南アはアフリカではないと言っていました。どいふ意味かといふと、まず気候が違ふと。アフリカ大陸にあつて、南半球で四季がある。春夏秋冬があり、他のアフリカのように砂漠でもないし暑くもない。どちらかといふと、オーストラリアにすごく似ている。社会とかインフラとか街とかも、アフリカといふよりヨーロッパに近く、オーストラリアに一番似ている

と言っていました。

行ってみて僕が最初に受けた印象も、ここはアフリカではないというものでした。アフリカで一番に感じるのは、発展途上国のインフラ的なストレス、つまりホテルの設備が悪いとか、通信設備が悪いとか、交通手段が悪いとかという、日常生活なり仕事をしていく上でのストレスなのですが、それが南アではまず感じられなかった。なまじヨーロッパの田舎の国よりも、全然スムーズに生活出来るし仕事も出来る。生活ということでは、あくまでも括弧付きで危険な所に近づかないという条件つきではありますが、そういう意味でアフリカではないです。

アフリカには、アフリカ時間という言い方があります。例えば今日のこの月例会は夜7時始まりですが、アフリカではその場合始まりは早くて8時過ぎ、大体は9時頃です。9時とか10時に始まって、12時頃に終わる。会合やパーティー、記者会見とかもそうですが、始まりが朝10時と言っても実際始まるのは11時とか12時で、食事をしながら始めましょうという話です。それがいわゆるアフリカ時間です。アフリカの人たちはそういう時間感覚の中で暮らしていますが、南アはアフリカ時間ではないです。人口の比率でいうと圧倒的に黒人が多いのですが、例えばメディアシャトルなどは時間通りに必ず出ますし、場合によっては時間より前に出ることもよくあって、それは逆にどうかとも思う。運転手がせっかちで、俺は早く帰りたいんだとか、早く行きたいんだとか言って、とっとと出てしまうことがあった。そういう意味では非常に時間に正確で、イギリス文化の影響のかなとか思いました。いわゆる一般のブラックアフリカとは一線を画している。そこがまずそもそも違っている。

あるいは、インターネットなども非常に発達していて、ホテルでもほとんど問題なく繋がる。ブルームフォンテンではゲストハウスに泊まりましたが、そこでも問題なく繋がった。速度は遅かったですが。アフリカ大陸でこういう国に行くのは、僕にとっても初めての経験でした。

住んでいる人たちの生活水準も、普通のアフリカの国々に比べるとずっと高い。タウンシップというのがあって、そこがいわゆる貧民窟みたいに言われてはいます。黒人の居住区で、大体どこの都市でも郊外にあることが多いです。ヨハネスブルグだったらソエトというのが一番有名な、すごく大きなタウンシップです。ただ、タウンシップといっても、一応上・中・下みたいなランクに分かれていて、一番低いクラス、中間のクラス、上のクラスがあります。上のクラスはかなりちゃんとした一戸建ての家をみんな持っていて、それが同じタウンシップの中でひとつの地区を作っている。道路を隔ててこちら側に中と下の地区があって、上は反対側というように、類型化出来ると思います。だから、黒人たちはタウンシップを離れない。裕福になってもタウンシップの中で引っ越しをして、タウンシップの中の繋がりからは出て行こうとはしない。彼らは基本的にそういう暮らしをしている。僕は中に入って見てはいませんが、下の家は外から見ると、トタン葺の屋根で多分中は土間だと思います。電気は入っていないくて、上下水道は一応あってみたいな感じだと思います。ただ、そのくらいのレベルというのは、アフリカのもっと生活水準の低い国に行けば、全然貧民でもなんでもなくて、ごくごく普通の暮らしをしている人たちの家であるわけです。それはもちろん国によって違うとは思いますが、それよりもう少し上のクラスになると、外から見ると非常に綺麗で新しい家です。電気も通っていて、大きさもそんなに小さくなくて、日本の2DKのアパートやマンションよりもちょっと大きい。例えば、昭和30年代とか40年代の棟割長屋とか、炭鉱町の木造の長屋みたいな、ああいう所よりはきれいで全然いい感じですよ。もちろん相対的なものではありませんが、他のブラックアフリカ諸国のインフラに比べると全然いい。たしかに対白人とか、南ア社会の中ではいろいろな問題があるのでしょう。そういう意味でも他のアフリカとは違う。皆さんが一番関心のある犯罪に関しては、僕らが泊まったのはヨハネスブルグの郊外です。まず一番言われているのは都市が危ない、そして都市の中ではヨハネスが一番危険だと。ヨハネス以外の都市はケープタウンの一部がちょっと危険だけれども、他の地方都市はさほど危険はない、あるいはほとんど危険はない、というふうに言われていて、実際その通りだったと思います。僕はケープ

タウンには行きませんでした。またヨハネスも危険な場所には一切近づかず、タウンシップには行きましたが、それはプレスツアーでタウンシップの危なくない所だけだったので、本当の危険な場所には行っていません。だから、そういう所で実際何が起きているかはわかりません。実は、最後はそういう地区にあるホテル、ホテル自体はメルキュールなのでセキュリティはしっかりしているのですが、そこに泊まろうとしたんです。それはヒルボローという南アで一番危険だと言われている所からそんなに遠くない所にあるホテルで、みんなからやめろと強く言われて、結局別の所にホテルが取れたのでそこには泊まりませんでした。そういう危険な中で、外出しない生活はどういうものかを、ちょっと経験してもいいなとは思ったのですが、結局それはしませんでした。実際に僕がヨハネスで泊まったのは、最初はサントンというちょっと北の方にある郊外の町です。そこはかなり安全と言われていて、実際に安全でした。セキュリティも非常にしっかりしていて、街中もある程度普通に歩ける。その後に泊まったのは、さらにもっと北に行った郊外の町、モンテカジノという所でした。そこはカジノがあって、ホテルがあって、ショッピングモールもあって、一般のレジデンスもあるという複合コンプレックスで、囲われた地域の中に全てが入っています。そういうレジデンスは郊外にたくさんあります。自分たちが囲った地域の中で、人々はセキュリティも自分たちでして暮らしているわけで、その中では一応安全であると言われていています。ただそれでも泥棒が入ることはあるそうです。モンテカジノはカジノがある所で、それまでは歌にもなったサンシティというのがカジノという有名な遊び場でしたが、場所は結構離れている。そこでもっと近くにということで作られた街で、24時間ずっとカジノをやっていて、週末は非常に人がたくさんいます。

結論から言えば、危険に近づかなければいい。それは例えばアメリカでも、ニューヨークのハーレムのようなものすごく危ない所があるわけで、そこに行く方が悪いわけですよ。南アでは、そうした場所が他の地域・都市よりかなり広い。例えば中央駅の辺りとか、ヒルボローの辺りとか、今回の会場のエリスパークの近くも、スタジアム周辺は安全なのですが、そこからちょっと離れると危険地域に入ってしまう。それはもう道一つ隔ててみたいところで、なおかつちょっと見ただけでは、旅行者にはわかりにくいところでもある。歩いているうちに自然に入ってしまう危険性もあるので、そこは十分注意しなければいけない。

後は、日常的な注意です。公共交通機関はほとんど利用しない方がいい。現地の人たちの最もポピュラーな交通機関は乗り合いタクシーですが、安全を考えると旅行者はまず使わない方がいいと言われてまして、実際僕らも使いませんでした。僕は普通のメータータクシーは何回も使いましたが、場合によってはメータータクシーもあまり使わない方がいいとも言われました。基本的に移動は、僕らメディアはメディアシャトルというのがあって、メディアホテルからスタジアムまでは行けたので、それを頻繁に利用するか、ホテルのリムジンを使うか、後は普通のメータータクシーを使って移動をしていました。

僕は今回長期で泊まったのは、ヨハネスブルグとブルームフンテンの2か所です。ブルームフンテンというのは本当に小さな町で、雰囲気としては鹿島ぐらいの大きさだと思っていただければいいのですが、ホテルもすごく少ないです。街も安全で、結局手違いからメディアホテルには泊まれずゲストハウスに泊まったのですが、その周辺は昼間は母親が乳母車に子供を乗せて普通に散歩していました。タクシーの運転手の話だと、別に夜もカバンとか荷物を持っていなければ、一人で歩いてもそんなに危険はないと言われました。ただ、そうは言っても最低限の注意は必要だと思います。また他の国に比べて、常に神経を使っていなければいけないという意味では危険のある国だとは思いますが、本当の危険な場所以外はさほど危険ではない。逆に危険以外のストレスは感じないところだと思います。犯罪が多いのは間違いないわけですが、地元の人たちに言わせると犯罪者は外国人だそうです。どういうことかと言うと、周辺諸国から出稼ぎに集まって来た人たち、彼らは金を稼ぎに南アに来ているのですが、仕事がないし、住む所もなかなか見つから

ない。それで都市の中心部に集まって犯罪を起こしている。南アの人間ではなくて、彼らが犯罪を起こしているんだと言って、実際それはある意味当たっている。南アフリカには死刑がありません、この国。一番重くても終身刑。昔ローデシアって言っていた隣国ジンバブエには死刑があります。そちらは南アに比べて非常に犯罪率が低くて、南アはすごく高い。死刑の話は関係あるのではと、日本人駐在員の人が言っていました、確かにそうかなとは思いました。

それからもう一つは、その日本人駐在員の話によると、その人は南アのソニーに来て一年くらいで、その前はイランなど第三世界の国々にいた人です。ソニーで現地の営業をやっているの、オフィスの中だけでなく外を積極的に回っている人ですが、彼によれば日本人は旅行者よりも現地駐在員の方が狙われるそうです。それは何故かという、旅行者は南アの場合ツアー客が多いからだそうです。現地駐在員は現地の人と実際に接するので、そういう時に窃盗団に目をつけられるらしいです。車で家に帰るときに後をつけられて、それで狙われる。犯罪と言っても計画犯罪が多いらしくて、泥棒のグループが目をつけた人間の家に計画的に忍び込む、そういった犯罪が多い。それを防ぐのはなかなか難しい。そのための手段はいろいろと講じられていますが、いったん入られてしまった家は泥棒の目印となるから、その家には住めなくなって引っ越す。一度狙われると次も狙われやすくなるそうで、そういうふうに駐在員が狙われやすい。中でも東洋系は狙われやすく、一番は中国で、二番が韓国、三番が日本だそうです。中国人は現地の人たちの仕事を奪うから。韓国人は威張っているからで、金持ちになるとすぐ金を使いたがって威張るらしいので、評判があまり良くない。日本人の場合、駐在員の多くは2~3年で帰るのであまりそういうふうにはならない、ただ、それでも狙われる時は狙われるそうですが、その人は一年の間で危険を感じたことは一度もないと言っていました。

警察官が、去年のクリスマスの時に、100mおきぐらいに検問をやっていたそうです。車を止めて、何かいちゃもんをつけてお金を取ろうとする。要するに警察官の給料が安いから、そうやって自分たちでお金を取ろうとしている。最初は一々止まっていたそうですが、あるときから止まらずに無視しても、追いかけては来なかったそうです。何故かという、いちいち追いかけて行ってすったもんだするよりも、止まる奴だけを相手にしてそこから金を取った方が警察官も効率がいいからで、そういうふうにして去年の暮れは相当しつこかったと言っていました。

実際に同じようなことはありました。例えば、フジテレビのクルーの車が止められて、本物の警察手帳を示されて財布の中身を調べられた。たまたまフジの運転手も警察官だったそうで、その人が自分の警察手帳を見せたら向こうは引いて行った。そういうことを警察官がやる。僕も到着した日に、空港からホテルに行く間に検問に一回遭いました。止まったパトカーの周囲に警官が4~5人で、車を止めてパスポートを見せろと言われました。ドライバーに聞いたら大丈夫だと言われた。その理由は、彼らは制服を着ているから大丈夫で、私服警官の方が危ないと。何を調べているのかと聞いたら、多分麻薬所持の検問じゃないかと言っていました。これは聞いた話で本当かどうかはわかりませんが、警官といっても要するに委託みたいな形で警官にすることも結構あるらしい。私服の警官はそういうのが多いから、そっちは気をつけた方がいいと言われました。

高橋：日本で、ソニーの車が狙われてテレビが盗まれたという報道がされていましたね。何か大会期間中にソニーの機材車が銃撃事件に遭い、薄型テレビ等々が盗られたと小倉副会長の記者会見で明かされたようです。それだけでしたね。

田村：それはちょっと、僕は知りませんでした。そのソニーの人は隠したのかどうか、全然何も言っていなかったです。多分その人は知らなかったのかな。

交通事故は多いです。渋滞しているから何だろうと思うと、事故渋滞が多かったですね。最初のころは渋滞と言えば事故渋滞だったので、南アでは事故渋滞しかないのかなと思っていました。実際

はそうではなくて、ヨハネスなどは夕方になると普通に渋滞します。(事故の画像を見せながら) これは車から撮ったのですが、こんな感じで結構事故車が道を塞いでいます。

中塚：(スライドをみて) いったいどうすればこんなことになるの？

田村：なかなかワイルドな人たちなんで(笑)。

エジプトのチームが女の人たちを部屋に入れて、それで金を盗られたというのが、イタリア戦に勝った後でありました。それはかなり現地で大きく報道されて、最初は娼婦だという話でした。要するに娼婦を彼らを買って、それで部屋で金を盗られたと報道されたわけです。地元の新聞がすっぱ抜く形で出して、それに対してエジプトが国(協会)を挙げて抗議したわけです。事実無根かどうかはよくわかりませんが、まずムスリムが娼婦を買うなんてことは一大スキャンダルなわけで、普通の国以上にそれが本当なら彼らは国に帰れない。だから当然抗議をするわけです。実際、事実関係として、女性は娼婦ではなかった。女性たちとは下のバーで飲んでいて、部屋に一緒に上がって行くのにエレベーターに乗ったところまでは証言があるのですが、そこから先の証言は、従業員からも何も出ていない。何故かエジプトのフロアを担当していたホテルの従業員7人が、しばらく後にクビになっているんですね。大会が終わった翌日に警察が記者発表をして事実関係を明らかにすると言っていたのですが、結局その時の発表でもその部分は曖昧なままでした。その後の報道を追っていないのでわかりませんが、多分有耶無耶なままに終わってしまったと思います。チーム関係だと、あとはブラジルチームが盗難に遭ったぐらいでした。これは本当に普通に選手のお金が盗られました。

報道関係では、ドイツ人カメラマンがプレスセンターでカメラや機材を盗まれた。その後、急にセキュリティチェックが厳しくなったのですが、プレスセンターを出る時にチェックしたりしてよくわかりませんでした。カメラや機材の番号まで控えさたり、形だけという感じでしたが、一応、セキュリティチェックは厳しくなりました。犯罪に関してはそんなところですよ。

2. コンフェデレーションズカップ～ワールドカップの予行演習としての評価

田村：次に大会の運営と組織、ワールドカップの予行演習としてのコンフェデレーションズカップとしてはこの大会はどうだったのか。実際に返上するのかしないのか、開催は無理ではないか、来年はどこか別のところで開催されるのではという話が根強くありましたが、それに関してはレジュメの2番の評価をご覧ください。後ろの3枚の記事で僕の友人であるフランス・フットボール誌のフランク・シモンが書いていますが、この大会を6つ(観衆、雰囲気、組織全般、スタジアム・芝生、セキュリティ、輸送・宿泊)に分けて10点満点で採点しています。フランス語なので皆さんが読めないものをお配りして申し訳ないのですが、2016年はフランスがEUROに立候補しているので、その時のためにフランス語を勉強なさるのもいいかなと。まあそれはともかく、彼は非常に高い点数をつけていますが、これはアフリカ基準だと思って下さい。つまり、このフランクはアフリカ・サッカーの専門家で、通常のアフリカの大会を基準にした時にコンフェデはこのぐらいのレベルにあったという採点だと思えば、この点数は間違いない。

フランク・シモン氏(フランス・フットボール)の評価	田村修一氏の評価	
観衆	7.5	6
雰囲気	8	6
組織全般	8	7

スタジアム・芝生	6	5. 5
セキュリティ	7. 5	6
輸送・宿泊	4	4

そういう意味では、例えばアフリカ・ネーションズカップなどに比べると、非常によく組織され、運営され、雰囲気の良い大会だったと言えるわけです。私はどちらかという一般的なヨーロッパなり、日本なりの基準で評価をしてみました。それでみると大体こんな感じではないかと思えます。全体が悪くなかったと思えます。

一つ一つ見ていきますと、まず観衆ですが、スタジアムは結局最後まで満員にはなりませんでしたが。ただ平均だと3万ちょっと入っていて、これはかなり高い数字です。決勝は6万人入るエリスパークで5万5千人。これはコンフェデ大会史上3番目の数字です。ちなみに1番お客さんの入った試合は2001年横浜の決勝戦（日本対フランス）で、2番目は韓国とフランスが大邱でやった試合で、今回の決勝が3番目です。実際チケットが高くてなかなか地元の人には買いにくかった割には、非常によく入っていたと思えます。ただ、例えばニュージーランド対イラク戦などは、地元の金持ちが1万枚チケットを買って地元の人たちにタダで配ったりしてはいました。今回は海外からの客、サポーターはほとんど来ていません。全然いかなかったわけではないでしょうが、目立った形では全く見ませんでした。

雰囲気に関しては、ブブゼラってご存じかどうかわかりませんが、(レジュメの写真で) ちょっと見にくいですがこれでもこのかいラップです。単なる空洞なんですけれども、ものすごいかい音を出します。それで、正直言ってもものすごくうるさい。南アの人たちは試合の内容に関係なく、のべつ幕無しに吹き続けるので、とにかくうるさいです。お客がそんなに入っていないなくても、威力はすごいです。日本だったら確実に禁止されると思えます。実際大会中問題になって、スペインのチャビが監督の指示が聞こえない、何とかしろとクレームをつけて、FIFAでもちょっと問題になりましたが、結局禁止にはなりませんでしたが。これは地元の人たちに向けての新聞の観戦ガイドですが、ここにスタジアムでのルールというのがあっていろいろな禁止事項が書かれています。例えば発煙筒を焚いてはいけないとか、その中でブブゼラは大丈夫とちゃんと書いてあります。これはどういう起源の物かよくわからないのですが、南アだけの独特なものだと思います。多分、来年もブブゼラはすごいですから、行かれる方は覚悟するなり、もしかしたら自分で一緒に吹くのが一番楽しいのかも知れませんね。ちなみに、プレスセンターの近くで僕ら日本人記者にある南ア人が声を掛けて来て、ちょっと話を聞いてくれ、俺はブブゼラの音を緩和するものを開発したと言われました。楽器に働きかけるのと、人間の体に働きかけるのと両方があるが、僕らが開発したのは人間の体に働きかけるものだと。名前は何だと聞いたら、「E、A、R・・・」と言うんです。見ると、要は耳栓なんです。それを、1つ10ランドだから買えと。1ランドは13円だから130円ぐらいです。僕ら3人ともいらないと言ったら、3人なら3つで20ランドにするから買えと言う。その時の3人とは、時事の宮沢くんと読売のロンドン支局の人だったのですが、宮沢くんが面白がってちょっと写真を撮らせてくれと頼んで、そいつが耳にしているところを写真に撮ったんですね。日本に配信したかどうかは知りませんが、そういうこともありました。その人は400個ぐらい売れたと言っていました。

それから南アではウェーブはすごくやりますが、もう一つ応援で面白かったのはレジュメの記事の一番大きな写真のものです。これは何かと言うと、プラスチックのヘルメットに自分で工夫してこういうもの(デコレーション)を付けるんです。一つ一つが全部オリジナルで、みんな思い思いに自分で作ったヘルメットをかぶっているのがすごく面白かったです。お土産に買って帰りたかったのですが、これたためないんですね。たためるのかと思っていたらたためなくて、すごくかさ張って持ち運びに不便なんです。手荷物だと絶対折れちゃうし、スーツケースには入らないから諦

めました。写真は白黒ですが、とてもカラフルで面白いです。

大会運営の組織に関して言えば、アフリカの通常の大会に見られるような混乱は全くありませんでした。どういう混乱かと言うと、例えばプレスチケットを配るのに2時間も3時間も待たされたりといったことです。プレス関係に関しては、FIFAの通常の大会のようなスムーズな流れで全てほぼ問題なくいきましたが、一つ言えるのは取材に来たプレスの数が非常に少なかったことです。混乱がなかったのは、それが大きかったと思います。今回の場合、カメラが全部で200人弱。試合によってはJリーグの普段の試合よりもピッチにいるカメラマンの数が少なかった。その程度だったので、決勝でもほとんどのカメラマンがピッチに入れた。ペンに関してもウェイティングは一回もなかったです。わかりにくいかも知れませんが、僕らの場合はIDを持っているだけではダメで、ワールドカップなどでもそれぞれの試合のチケットがないと、プレス席で試合を見たり、ピッチサイドに降りて写真を撮ったりとか出来ない。カメラはペンよりも入るのがずっと難しいのですけれども、今回はそういうのは全くなかった。もし日本が出場していたら、日本のメディアに200人分くらい必要だと思うので、そうなっていたら全然違う様相を示していたのではないかと思います。かなり混乱していたのではないかと思います。また、今回はアフリカの他の大会と違って、アフリカ大陸内のメディアがほとんど来ていませんでした。ヨーロッパから少数のメディア、出場国のメディアはそこそこいたけれども、それでもEUROほどではないですし、出場していない国のメディアは非常に少なかった。そういう意味で、混乱の起きにくい状況であったことは確かです。それが例えばサポーターが数万人単位で大挙して訪れる、プレスの数も何千人になるといった時に、実際どうなのかというのはまた別の問題であるような気がします。

それはセキュリティに関しても同じで、人数が少ないからセキュリティも保たれた面があったと思います。セキュリティチェックは非常にゆるかったです。金属探知機を通るのですが、ブザーが鳴っても別に「OK、OK」とか、カバンを開けても中をほとんど見ないとか、非常におざなりでした。悪意を持って何かしようと思えば、簡単に出来る状況ではあった、特にプレスに関してはそうです。一般のセキュリティがどうだったのか、僕はそこまで確認していないのですけれども。

徳田：入場ゲートは通ったんですか？

田村：いや、プレスゲートです。一般のゲートは通っていません。

徳田：EUROと違って、ゲートがあつてチケットを挿すと緑色のランプがピコっとなついてガチャッと開いて入って行きますよね。決勝ではそれと同じゲートがあつたんです。だから僕は、チケットにはホログラムが付いていてバーコードも打ってあるので、挿して赤いランプがピッと緑になったら通れるかなと思っていたんですね。それで近づいて行ったら、そんな雰囲気がないんですよ。もぎっているんですよ、チケットを。ここ何年間でチケットをもぎられたのは初めてですよ。緑のランプも点きっぱなしで、全然作動チェックもされていなかった。

田村：荷物検査とかはどうでしたか？

徳田：ゲートを入ってから、荷物検査はありましたよ。

田村：それはちゃんとやっていましたか？

徳田：いや、まあ適当でした。本当に偽チケットとか、人数がすごくいたら、あのゲートはパンクしていましたよ。

田村：絶対混乱していましたよね。それは僕も感じました。ただ、試合当日にワインを持ち込もうとしたのですが、それは取られました。別にスタジアムで飲むのではなくて、ホテルに帰って飲もうと思っていたものです。ワインのボトルを持って中に入ろうとしたら、それはダメだと言われて、そこだけはちょっと厳しく取られました。終わった後に回収したいからここに置いておいてくれたら、俺たちは8時で帰るからダメだと言われて、回収も出来ませんでした。

スタジアムと芝生に関しては、ブルームフォンテーンは新しいスタジアムで良かったのですが、導線が結構問題でした。これは今後改善されると思いますが、メディアと一般の人の導線がちゃんと分かれていなかったり、記者会見場が変な所にあって行きにくかったり、プレスセンターのトイレがちゃんとしたトイレがなくて使っていないサブグラウンドのロッカールームのトイレだったり、といった細かい問題はありました。それと、エリスパークの芝はちょっと状態が悪かったですね。一番の問題は、やはり最後の項目の輸送と宿泊です。特に地方都市では、ホテルの数が圧倒的に少ない。これは大変だと思います。僕は今回、ブルームフォンテーンは当初メディアホテルを取ったのですが、手違いからお金の支払がちゃんとされていなくて結局取れなかったんですね。それでいろいろ探して、最初に一泊だけ泊まったゲストハウスに連泊することになった。たまたま見つかったから良かったのですが、南アフリカ戦の試合当日はその日だけどこも空いていなくて相当大変でした。今の状況でこれですから、サポーターが千人とか一万人単位でやって来た時には、かなり大変だと思います。現在、例えばブルームフォンテーンは新しいホテルを作ったりしていますし、テント村も作っていると言っていますが、実際どういうふうになるのか。これはちょっと何とも言えないと思います。皆さんがどういう形で、どれくらいの期間の滞在を考えているのかわかりませんが、南アに関しては弾丸ツアーというのも一つの手かなとは思いますが、長期に行くのであればやはりどこかに、ヨハネスが一番いいとは思いますが、ベースを置いてというのが最も合理的かなと思います。

移動に関しても、かなり大変です。僕は飛行機の国内便は簡単に取れると思っていたので、国内の移動に関しては、日本でほとんどアレンジしていませんでした。直前になってやったのですが、結構大変だということがわかって、その時は全部は取れませんでした。結局ブルームフォンテーン・ヨハネブルグ間は2回取れませんでした。理由は南アフリカ航空の便数がそんなに多くないのと、飛行機のキャパが小さい。プロペラ機なので収容人員が少ないのですぐ一杯になってしまいます。臨時便も増発しましたが深夜便だったので、僕はすでにホテルを決めていてそれには乗れず、深夜便は使えませんでした。ただ、いずれにせよあの大きさではかなり足りないと思います。来年に向けては、何とかするとは思いますが。

では、取れなかったところはどうかというと、友人が借りていたレンタカーで2回移動しました。レンタカー、車は結構有効だと思います。今回の場合ですと、ヨハネス、プレトリア、ルステンバーグというのは、離れていても100kmちょっとなのでそんなに遠くない。一番離れていたのがブルームフォンテーんで、これはヨハネスから300km少々ありますが、それでも車ですぐに移動出来ます。道が真っ直ぐで、その辺もすごくオーストラリアに似ていて、わずか3時間のドライブでも確実に眠くなります。僕は免許を持っていないので、助手席に乗っていたんですけども。(写真画像を示しながら) こういう道が延々と続く。同じ宿に泊まっていたAFPのフランス人カメラマンなんかも、300kmあってもカーブが4つしかないなんて言っていた。最初のうちは「やっぱりアフリカっぽいじゃん」とか言って景色を見ている、そんなのは30分で飽きます。後はひたすらこういう道が続くだけです。中央分離帯がない。これ(写真)は両側2車線ですけども、場合によって片側2車線でもう一方が1車線だったり逆だったりとか、追い抜く時に危なかったりするんですよ。今回に関しては、下り車線は車がほとんど通ってなくて、上りの車だけでしかも台数が多い。これはブルームフォンテーンからヨハネスへの道路です。高速道路で、料金所もあります。

高速には見えないけれども、信号はないです。

徳田：車線が面白いですよ。普通本線があつて、追い越し車線があるじゃないですか。それが、本線があつて追い越され車線というのがあつて。だから、車が後ろから来ると、追い越される時に左によけるんですよ。それにはビックリしました、何だこれはって。

田村：これ、対向車が多かったら確実に事故がありますよね。

徳田：確かに、事故を2回ぐらい見ました。北海道の道より真っ直ぐですよ。眠くなっちゃう。

田村：本当に隣に座っているだけで眠くなるから、一人で運転していたら確実に眠くなりますね。レンタカー会社は結構あつて、比較的簡単に借りられると思います。南アは日本と一緒に左ハンドルじゃないから、イギリスの植民地だったので右ハンドルなので、日本人には運転しやすいのは間違いないでしょう。

国島：例えば、眠くなって寄せて止めたりしたら危ないんですか？

田村：そんなことしている人はあまりいないです。これ（写真）は途中で昼飯食いに寄つた、高速からちょっと外れた小さな町ですけど、日曜日で人が全然なくてゴーストタウンみたいですよ。ケープタウンとポートエリザベスは離れているから車で移動は無理ですけど、それ以外はレンタカーを借りて2~3人で移動するのが、移動手段としてはかなりいいかなと思いました。

阿部：気候について教えて下さい。

田村：冬ですけども、そんなに寒くないです。僕は今回防寒着をほとんど持っていかなくて、薄手のセーターとジャケットだけで、後はトレーナーぐらいでした。でも、ブルームフォンテンはすごく寒い時があつた。その時はさすがにきびしくて、泊まっていたゲストハウスのオーナーという人がすごく親切でフリースを貸してくれて、それがあつて寒さをしのげた。あの時期、南アは南半球で冬ですけども、日本の晩秋とか初冬とかそのくらいの感じを考えればといいと思います。特にダーバンは、僕は行ってないけれども、岡田さんは行ってかなり暖かかったと言っていました。薄手のコートとか、厚手のジャケットとか、ダウンみたいなものが一つあれば全然問題ないと思います。

阿部：さっき話に出て来たテント村ってあり得るのでしょうか？

田村：どうでしょうね。交通に関しても今作っているんですよ。電車を空港から新しいスタジアムまで通して、プレトリアまで行くという鉄道を作っています。バスについては、バス停もトラムの駅のようなものを作っていて、路線もバス専用道路を作っています。電車にしてもバスにしてもどのくらいの安全性が確保出来るのか。彼らは大丈夫だと言っているけれども、実際どのくらい使えるものなのか、出来て運営しているのを見なければわからない感じです。僕の個人的な感想を言えば、本当にそういうところのセキュリティを確保しようと思ったら、やっぱり警官なり場合によっては軍隊を動員しなければ無理じゃないかと思います。どうなることかですね。

3. コンフェデレーションズカップのサッカー～世界の動向

田村：サッカーに関してですが、まず僕が思っていた以上に面白かった、それは元々あまり期待していなかったというのもあったんですけども。状況として、ヨーロッパのシーズン終了直後だった。だから、選手たちのコンディションとモチベーションがどうだろうかと。特にいわゆるサッカー大国ですよ。今回ですとブラジル、イタリア、スペインの3つに関してはその影響があったと思います。ブラジルに関しては、ヨーロッパのシーズンが終わったのに加えて、ワールドカップ予選の重要な試合が終わった後だった。その後もずっと遠征を続けて、この大会が最後だったこともあり、選手はかなり疲れていたと思います。同じようにスペインも、ちょっと雑とは言わないけれども、強引なプレーが目立っていたのは、そういうことだったと僕は思っています。もちろん、それだけではないですけども。ただし、気候が良かったので試合自体のコンディションは良かった、サッカーをプレーしやすい気候条件だったと思います。そういう意味でクオリティの高さは維持された。フランスでやったコンフェデとか、ドイツでやったコンフェデは、ものすごく暑かったですよね。フランスの時は暑さで線路が曲がって TGV が止まったり、ドイツの時も信じられないぐらいクソ暑かった。それに比べると、非常にサッカーをしやすい良いコンディションであったと言えます。ファースト（トップ）グループではないセカンドグループ、僕はどちらかというところこちらの方に注目して観ていました。具体的にはアメリカとエジプトで、南アフリカはちょっと落ちると思っていました。日本よりもほんの少し力が上のチームが、ファーストグループのチームに対してどのくらい出来るかと。実際そのセカンドグループのチームはモチベーションも高く、こういう状況ではこのくらい出来るということを示してくれた、アメリカが決勝まで行きましたが。この状況は、ワールドカップのグループリーグと同じ状況、つまり優勝候補の国々はまだエンジン全開ではなく7割～8割ぐらいの力で大会に入るわけです。そういう中で、グループリーグを消化して上にあがって行こうとする。それに対して、セカンドグループのチームは最初からトップコンディションで、全力を挙げてグループリーグの突破を狙うとする。図らずもそれと同じような状況が出来て、セカンドグループがどのくらい出来るかという中でアップセットが起った。要するにセカンドグループが、そういう状況でファーストグループのチームに勝ち得る、つけ込めるだけのレベルに上がって来たことが示された大会であったと思います。

ファーストグループについては、スーパーなチームはなかった。スーパーなチームというのは、個人的には「宇宙人のチーム」という言い方をしているのですが、人間離れしたチーム。僕が記者として取材するようになって観た中では、リッピが作ってジダンが全盛だった頃のユベントスと、1998年から2000年過ぎくらいまでのフランス代表。あの2チームは人間離れしたチームでしたが、そこまでスーパーなチームはなかった。一番近かったのは対エジプト戦前半のブラジルで、そういうチームでしたね。どういうサッカーをやったかという、前線から効率よくプレスをかけて、動きの量は激しくないけれども間合いとか角度の詰め方が非常に上手かった。あれだけバランスのいいエジプトが前にボールを運べない、後ろでボールを回すだけで精一杯だった。ボールを取った後は2つぐらいのパスでゴール前まで持って行きフィニッシュを決める。オシムの言う戦術的なディシプリンが非常に高かった。けれども、そういう戦い方をブラジルがしたのは、僕が観た中ではこのエジプト戦の前半だけでした。ブラジルに関してもっと言えば、このチームは基本的にドゥンガとカカのチームです。カカは大会の MVP にも選ばれましたが、ドゥンガのチームというのは、ジーコなどのチームと違って非常に戦術的なチームであるということです。ブラジルで戦術的なチームという、これまでの評価ではアンチフットボールの意味合いが強かったわけです。例えば90年のラザローニの3バックのチームだったり、あるいは94年の優勝したけれどもブラジルのではないと批判されたチームだったり、評価の低かったチームであった。ブラジルでヨーロッパ的な戦術を取り入れるとどうしてもそういうふうになってしまう。そのどちらのチームも中枢はドゥンガで、じゃ

あそのダウンガが監督になってどういうチームを作ったかという、まず分析を重視する。ジョルジーニョがテクニカルスタッフに入っていて、相手チームの分析を非常に綿密にやるわけです。それでどう戦うか戦術を立てるのですが、そこで機械的にならずに柔軟性を持たせるのが、ダウンガが監督として成熟したところかなと思いました。例えば決勝のアメリカ戦は、前半 2-0 でリードされ、もう 2-0 になった後はちょっと投げやりなゲーム運びでしたが、後半に入って 1 点取ったのが良くて、そこから攻め出した。展開はそうでしたが、戦術的にはサイド攻撃が大きなポイントとしてあった。アメリカの 4-4-2 のディフェンスのブロックは非常に固いですよね、中にボールが入ったらそこから出さないというような。では、それをどうやって崩すかという時に、サイドから崩してゴールキーパーとディフェンスラインの間にクロスを入れる。ただし狙いはそれひとつだけじゃなくて、いろいろなことをやりながら中にいったり外にいったりして、そこはブラジルのであるわけです。その中でカカが中心的に動くわけです。戦術と個のバランスが非常にいい形で取れているかなと思いました。これだったらブラジルのサポーターも、昔のように拒絶反応を起こさないだろうな、というような戦術的なサッカーになっていたように思います。ただ、フィジカルコンディションは全体に良くなかった。例えば南アフリカ戦は 1-0 のスコアで南アが健闘したと言われていいますが、南アが一番攻めていたのは後半が始まってから 30 分ぐらいの間です。その間どういう状態だったかという、カカがブラジルの前線に張りついて全然動かなかった。カカが消えていた時間帯に南アがボールを支配して攻め込んでいた。その後カカが中盤に下がって動くようになりボールを持ちだすと、南アは攻められなくなって、決勝点はフリーキックでしたけれども、ブラジルがきっちり点をとって勝ったという展開でした。どの試合も全力を出していたわけではなく、コンディションが悪い中でブラジルはレベルの高さを見せて優勝した、そういう大会だったと思います。

次にスペインですけれども、スペインの方がブラジルよりも選手のモチベーションは低かったように見えました。根拠はないですが、相手をなめてかかっていたとか、雑というよりは強引なプレーが目立ちました。つまり、パスワークではなく、一人で最終局面を打開する。EURO のスペインだったらパスワークで崩していったところを、強引に一人の力で崩したりシュートしたりという場面が見えたと思います。二つめには、監督がアラゴネスからデルボスケに代わった。EURO のアラゴネスのパスサッカーは非常に評価が高かったわけですが、そのパスワークはなかった。僕は最初、セナとかイニエスタといった選手がいないなのかと思っていましたが、それだけではないようでした。スペイン人がその辺をどう思っているのかはわかりませんが、デルボスケもアラゴネスのスタイルを継承すると言っていた。例えばサイドは重視してサイドアタックはしますが、どちらかという、単調な縦の動きのサイドアタックでした。EURO の時のようにサイドが起点となってパスでサイドを崩していく、セルヒオ・ラモスも突破者としてではなくパサーとして働いていた、そういうスタイルではなかった。でも別に勝ちやすいやという感じで、選手はみんなやっていた。それは監督が代わって、プレースタイルが変化したからなのかなというふうに見えた。先を見ないとわからないですけど、もしそうだとしたら僕らが評価したアラゴネスのサッカー、スペインのサッカーというのはあそこで一つ終わったのかなと、一つのポイントとして思いました。イタリアですが、まず今回連れて来た選手を見て、本当にこれだけの選手しかいないのか、人材不足だと思いました。イタリアのサッカーは守備的というか、守備が強い。ただしそれは前線、攻撃のタレントがいるから、あれだけ守備偏向型のサッカーをやってもバランスがとれていたわけです。今回アイロニカルだったのは、攻撃のことをいろいろと模索しているから守備に重きを置いていなかった。フォーメーションは常に 4-3-3 で前線の選手は取っかえ引っかえでした。最初は 4-3-3 といってもトップに 3 人並べてその後ろにピルロという形。岡田監督がキリンカップの時に中村憲剛のシステムだよといってチリ戦で試したやり方で、前の 3 人をピルロが使うという形を初戦の前半にやったけれどももうまくいかなかった。それで普通の 4-3-3、前線の 3 人は連動させる、中盤の 3 人は

連動させるという形に変えた。後半は交代選手のロッシが活躍してうまくいったので、次の試合はロッシを先発させて同じシステムでやったら今度はダメで、そこでトニを使ってみたり、いろいろな選手を試してみた。その後システムはあまり変えず、4-3-3のままずっとやっていたのだけれども、最後までうまくバランスが取れなかった。攻撃を重視するシステムとサッカーだったので、守備に関してはイタリア伝統の強さ、固さというのがなく、だからブラジルにあんな簡単に負けたのだと思います。4-4-2でやろうと思えば、ドイツワールドカップの時のような守備をベースにしたサッカーを出来ないことはなかったと思います。それをやらずに攻撃を模索しながら最後まで上手くいかなかったところに、リッピの苦悩というか、イタリアはそこまで深刻なのかと感じました。選手個人としては10番のデ・ロッシ、彼がひどかったです。どうしてイタリアであんなに評価されているのかが全然わからない。守備は無茶苦茶だし、攻撃もいいところはなかった。タレントが本当にいないのか、それともいるのか、そこもちょっとわからなかった。オシムは今でもイタリアのことをすごく評価していて、若手が育って来ているみたいに言うのですが、本当にどうなのかなと思いました。ここまでがトップグループのチームのそれぞれに話でした。

セカンドグループでは、僕はアメリカがここまでやれるとは思っていませんでした。内実をあまり知らなかったからですが、力は日本に毛が生えた程度かな、昔からそんな感じですから、と思っていました。むしろ注目していたのはアフリカ・ネーションズカップ2連覇のエジプトでした。2006年は地元の大会なので優勝出来た部分が強くて、実力的にはコートジボワールの方が上だったと思います。それが去年のガーナの大会では間違いなくアフリカ最強チームである上に、組織と個とのバランスが一番取れていたチームでもありました。エジプトというのはアフリカの中でもちょっと特殊な環境にあって、そこを説明すると長くなりますけれども、クラブワールドカップに来ているアル・アハリを見てもらえればわかりますが、ああいうチームです。非常に組織的かつ戦術的なサッカーで、なおかつフィジカルも、アフリカの中ではさほど強くないですけれども、日本に比べれば相当強いチームである。去年のアフリカ・ネーションズカップでは、総合力で頭一つ抜けている感じがしました。そういうチームがどのくらい出来るのか。しかし現実の戦い方としては、アフリカで普段戦っているエジプトの戦い方は出来なかった。力関係から押し込まれて守っている時間が長くなり、そこからカウンターを仕掛けていく、そういった戦い方にならざるを得なかった。それでも選手一人ひとりの能力の高さ、それは個人としての個の能力の高さだけではなく、戦術的なレベルの高さも随所に出ていたと思います。それで実際イタリアに勝って、ブラジルとも相当いい試合をした。ただアメリカ戦は出場停止と怪我人が多くて、選手を5人くらい代えて負けてしまい、結局グループリーグで落ちてしまった。準決勝でスペイン相手にどのくらいやれるかを見てみたかったのですが、期待していたレベルの高さを見せてくれました。ただエジプトの場合はそれだけのチームでありながら、最近ワールドカップには出場していない。南ア大会の予選でもアルジェリアと同じグループで、現在先行されていて出られるかどうかわからない状況です。あれだけのチームがワールドカップに出られないのは、アフリカは相当レベルが高いと思います。

アメリカに関しては、あまり知りませんでした。グループリーグで負けてもおかしくはありませんでした。最初の2試合は退場者を出したこともあり、ズルズルと負けてしまった。元々アメリカというのは、シドニー五輪の日本戦を見るとわかるけれども、非常に組織がしっかりしているのに加え、アスリートとしての能力もそれなりに高く90分間スタミナが続く、さらにそこその個人技もあるチームです。今回であれば、ドノバンとか8番をつけたデンプシーなど中盤にそれなりの選手を揃えている。これはアメリカだけではないのですけれども、セカンドグループはどこも大会を通して成長をしていました。トップグループのチームとこういう大会で試合をすることで、最初は出来なかったことが出来るようになってきたし、選手が自信を持ってやれるようになったのが、外で見えてもわかった。アメリカはその一番顕著な例で、自分たちが普段やっているサッカーが段々出来るようになっていた。そうして頑張りきったのがスペイン戦だったわけです。あの試合は彼ら

の組織的なディフェンスの良さ、その中でも一人ひとりの頑張り、そこで個人が連動してカウンターで点を取って行くという、彼らの力が 100%以上出た試合だったと思います。そういう戦い方をしながら強くなっていて、決勝のブラジル戦も、特に前半はあれだけの戦いが出来た。正直言って勝ち切っただけで欲しかったです。前半にもう 1 点取るチャンスがあったし、そこで取ってれば展開は違っていたのかとも思います。ブラジル戦の前半は、アメリカがそれまでのどの試合よりも積極的であった。確かに攻撃の機会はそんなに多くなかったけれども、ディフェンスにしても今までよりは前掛かりでアグレッシブであったし、ボールを取ってからの積極性がそれまでのどの試合よりもあった。最後の試合だし、ブラジルと自分たちのフィジカルを比べた時に自分たちの方に分があると思って、アグレッシブにやっているのかなと思っていました。でも、後半ブラジルに攻勢に出られた時に、出足が鈍ってしまった。スペイン戦などでは体を張ってギリギリのところまで止めていたのが、少しずつ遅れるようになって点を取られてしまった。そこまでやっただけでも大したものだと思いますが、最後までフィジカルが落ちることなくやりきれののかなと思って後半を見ていただけにちょっと残念でした。

南アフリカは地元の声援を受けて非常に健闘し、最後はスペインと延長までいった。しかも 0-2 から挽回して面目を保ったし、大会を通してチームが成長して自信をつけたのは間違いない。ただ監督が素材を活かしきっているのかという疑問を持ちました。ジョエル・サンタナというのはベガルタ仙台にもいましたが、南アでは前任者パレイラのアシスタントをやっていて、パレイラが帰る時に彼から推薦されてチームに残った。ブラジル・スタイルのポゼッションサッカーなので弱い相手にはいい。オーソドックスにパスをつなぐ、それ自体は悪いサッカーではないんです。例えばニュージーランド戦とかでは非常に上手く見えるしいいけれども、強い相手には同じことが出来ない。そうなった時に個人の力になってしまう。一人ひとりの連携が取れていない。ボールを持たない選手が動くサッカーではない。ですから、おのずとそこに限界が出て、しかも切り替えが遅く、そこでの判断も遅いし良くないので、いいタイミング・いい形の攻撃がなかなか出来ない。中盤にはタレントがいても、決めきれぬフォワードがいないのも問題です。勝てる道はほかにあるけれども、それを選択出来る監督ではないと思いました。今大会結果が良かったので本大会までやるとは思いますが、日本が同じグループに入ったら、この監督でいてくれた方がありがたいと思います。

ニュージーランドは省きますが、イラクはアジアなので少し話をします。ここはワールドカップ予選で負けてしまい、この大会以外に大きな活動は何もない状況で、大会直前にボラ・ミルチノビッチが監督になって臨みました。その前にはトルシエにも話がありましたが、結局断わられてボラに決まりました。時間の無い中での準備で、ボラは守備しかやっていないと思います。だから、ディフェンスは本当に素晴らしかったです。負けてしまいましたけれども、人に対してあまり動かない、人をケアするよりもブロックで守るといふボラの得意なディフェンスです。それだけは本当に見事で、彼のすごさというか職人芸を感じました。

4. 日本の準備と可能性

田村：最後に日本に関してですが、もし日本が出ていたら、グループBだったら上には行けなかったと思います。グループAでも、果たして今の日本で南アに勝てるのか、あるいはイラクの守備を破れるかは、やってみないとわからない。そういう意味で今の日本代表がどれくらいの力かという、多分ジーコジャパンのほうがちょっと上かなと思いました。別に僕はジーコを評価してはいませんが、そういうふうには思いました。

では、日本はこれからどうしていくかという課題ですが、これはトルシエが言っていることですが、要するにグループ—今実質的にプレーしているのは 14~5 人で、それを 23 人にこれからどう大きく

していくかということ。もうひとつは経験です。アジアレベルではない世界レベルで、どう経験を積んでいくかという点で、コンフェデに出られなかったのは非常に大きな損失でした。ただそこで、岡田さんは自分たちのスタイルを突き詰めていくと言っていますが、相手との力関係でそのスタイルをどう修正していくのか。例えばトルシエの場合は、フランスに大敗した後に攻撃と守備のバランスをもう一回考え直しました。ジーコはそれをやらなくて、他にもいろいろあって失敗したのだと思います。そういうところをこれからどう分析してやって行くのかということ。つまり日本の場合は、チャンスに関してはアクションよりもリアクションの方が多いわけで、そのときにどこまでアクションサッカーをつきつめていくのか。これはすごく大事な問題で、時間をかけて話し合っていくべきことです。特にスプリントに関しては、非常に大事な問題だと思っています。オシムは走る量が足りないと言うとき、それは走る絶対量よりスプリントの量を指しています。では、スプリントの量とは一体何であるのか、その質と量の問題であるわけです。どういう質のどういうスプリントが足りないのかを明らかにしないとイケない。見た目にはすぐわかります。日本の選手がどこでどう走るのかと、ブラジルの選手やマンUの選手がどこでどう走るのかとは、見ていて明らかに違いますから。見ていてスプリントの質も量も足りないというのはわかります。では、具体的にどこがどう足りないのか。そこはかなり火急的に、出来ればワールドカップに間に合うように、明らかにしていくべき問題であると思います。ストライカーとか決定力といいます。チャンスを作るだけではなくて、オシムが言うゴール前での数的優位を具体的に作ることを、建設的にやっていかなくてはイケない。形として、やり方としてそれを突き詰めていかないと、点は取れないのではないかと。ストライカー不足というよりそっちの問題ではないかと思います。トルシエはそういう形を作った。チーム全体が動く形を作ったから、ストライカーが点を取らなくてもワールドカップで点が取れたわけです。岡田さんは徐々にアタッキングサードまでの形を作りましたが、そこから先のゴール前の形というかコンセプトを、具体的にどう作っていくのか。それはすごく大きな問題で、個を強くするとかだけではなく、考えていかなければイケない問題ではないかと思っています。

高橋：どうもありがとうございました。それでは、質問をお受けします。

5. ディスカッション

徳田：スタジアム・芝生というところで評価が 5.5 ポイントになっているんですけども、僕も試合の次の日にスタジアムを訪ねて行ったら、中に入れてくれて、ピッチまで行って芝に触ってみたんですけど、固くなかったですか？

田村：ああ、そうですね。

徳田：ヨーロッパでやると下が柔らかいじゃないですか。固い芝は日本に近くて、日本代表がヨーロッパに行くときスパイクのポイントが合わなくて負けちゃうなんてことがある。今回もし日本代表が出場していたら、芝が固くて日本に近くて、イケたんじゃないか。何でヨーロッパのチームが負けたかっていうと、下が固かったからじゃないかと思ったんですけど、そのような要素はありませんでしたか？

田村：もしかしたらそういうのもあるかも知れないですけど、僕はそこがそんなに大きな問題のように思っていなかったです。ちょっとそこはわからないですね。確かにヨーロッパのチームはやり難かったかも知れないですけども、ブラジル人は平気にプレーしちゃいますからね。

徳田：3試合目、4試合目になって来るとやり慣れないので、やっぱり疲労が溜まって来てというのがあるのかなと。決勝がスペイン対ブラジルになると思い込んで行ったのにスペインがこけちゃって、そういうのもあったんですけど。

田村：何らかの影響はあったかも知れないですけども、ちょっと具体的にはわかりません。

井上：芝に関しては、ラグビーの試合をやったというのが影響していると記事には書いてありますね。2007年のラグビーのワールドカップをフランスでやった時に、全く逆のことが起こっているんですよ。あの時はサッカーの試合もやっちゃったので。スタジアムは元々ラグビー場で、今回ブリテイッシュライオンズが確か行っているんですよ。

田村：ちょうど大会中に来ていましたね。

徳田：それで混んでいたんですね。

井上：多分、田村さんも初めて冬の大会ってご覧になったんじゃないかと思うんですけど。南米選手権を除くと。

田村：冬の大会といいますと。

井上：1978年のワールドカップ以来、サッカーでは冬の大会ってやっていないと思うので。

田村：そうですね。

阿部：来年、我々サポーター的な形で見に行く人にとっては、やっぱりコンフェデよりも、ブリテイッシュ&アイリッシュライオンズのあの2万人とか3万人のイングランド人やアイルランドの方が、もしかしたら参考になったのかも知れませんね。

田村：かも知れないですね。今回はライオンズのサポーターがすごく来ていました。僕は行きも帰りもパリ経由のエールフランス便でしたが、帰りの飛行機にはライオンズのサポーターたちが結構たくさん乗っていました。

牛木：イングランドのラグビーのサポーターがたくさん行って、2万人行ったとか2万5千人行ったとか言われているわけなんだけれども、それがあの治安の悪い、交通の悪いところでどう行動したのかっていうのが、彼にとっては興味があるという問題だね。

田村：ラグビーのサポーターはわかりませんが、イングランドのサッカーのサポーターって結構みんな傍若無人ですからね。ラグビーはちょっと違うのかも知れないですけども、チャンピオンズリーグの決勝とかだと、大体3~4日前から来て、チケットがなくても来て、街中でたむろして毎日ビール飲んだりしている。僕が最後に泊まっていたモンテカジノというところで、クローズドサーキットがあって、みんなビールなんか飲みながら見ているんですけども、全部白人でしたね。警備の人以外、黒人は一人もいなかった。

阿部：残念だったのは、今回 6 月の同じ時期に日本でラグビーの U-20 世界選手権があったので、ラグビー関係のメディアが南アにはほとんど行っていないと思うんですよね。皆さんご存じだと思うんですけども、1995 年にはラグビーのワールドカップが南アで開催されています。この時に出てくるラグビーマガジンでは、大会の展望号でも終わった後でも、今回のような治安の悪さについてほとんど触れられていない。だから、この 15 年くらいの間で治安が悪くなったのかなと思ったんですけども。

田村：治安は悪くなっています。元タイギリス領だから、イギリス系のコミュニティが出来ているわけで、多分その中でラグビーの人たちは行動していると思うんですよね。だから、そういう意味ではそこにいる限り生活圏も重ならないし、黒人たちや黒人社会との接点はほとんどないと思います。

中塚：黒人と白人が共に行動しているような場面ってあまりないんですか？

田村：数はいますけどね。ホテルの従業員とか警備員などは混じっていますけれども、どうなんだろう。例えばホテルのリムジンの運転手とかにどこに住んでいるのって聞いてもソエトって言えますし。やっぱり社会は完全に別れている感じがしますよね。

本杉：先程クロズドサーキットの話があったんですけども、例えばドイツのワールドカップであったファンフェスタのような形のものは、今回コンフェデであったのかどうか。要は民間のところがスクリーンとかテレビを用意してやったというのではなくて、大会組織委員会みたいなものがやったものがあったかどうか。多分来年のワールドカップではそういうことが行われると思うんですが、それについての具体的な話がどこまで進んでいるかみたいなことは聞かれましたか？

田村：決勝に関しては、確認したわけではないですが、多分やっていたと思います。決勝の中継の画面で別のスタジアムが映っていて、そこで人が入ってスクリーンに映してやっていたんですよ。だから、そのスタジアムを開放してやっていたんだと思うんですけども、ちょっと確認はしていません。そういうことに関しては、僕はあんまり勉強もしていないし、取材もしなかったので、すいませんがちょっとわかりません。

本杉：先程言われたクロズドサーキットは？

田村：それはラグビーです。ライオンズとスプリンボックスの試合をモールの中の広場でやっていて、サッカーも多分そういうのをやっていたと思いますけどね。サッカーの試合は、テレビでやっていたのはすごかったですね。スポーツチャンネルみたいなやつなんですけれども、一つのチャンネルがもうそればかり継ぎ目なく、一試合が終わるとすぐその再放送また再放送みたいな感じで、24 時間試合の放送をしていました。レストランとかでもそういうのを流しっぱなしみたいな感じではやっていました。

牛木：ちょっと補足すると、パブリックビューイングとレストランなんかでテレビを見るのはまた違って、パブリックビューイングをやろうとすると放映権の問題があるんですよ。ドイツであれだけやれたのは、ベッケンバウアーがパブリックビューイングの放映権をみんな買ったからなんです。もう一つ今の話の中で、パブリックビューイングとドイツでやったようなファンフェスタともまた別のもので、ファンフェスタというのはドイツでは 12 の開催都市の中で一つの組織委員会が作ったパブリックビューイングなんです。そうでないパブリックビューイングもあったんですけど、だから、

今ちょっと三つの話が入り混じっているんじゃないかと思います。パブリックビューイングと普通にレストランなんかでテレビを見るのとは違うし、それとファンフェスタもまた違う。

徳田：ネルソン・マンデラ・スクエアの中にファンフェスタ的なものがありましたね、サッカーコートもあって。

田村：あれはソニーがやっている「FEVA Pitch」というやつで、フットサルの大会ですね。フットサルの全国大会をソニーが3年前からスポンサードしています。今大会が3年目なんですけれども、ゲストとして中田英寿や北沢豪なんかを呼んでいました。また元南アフリカ代表の選手が「Sony All Stars」としてエキシビジョンマッチもやっていた。本当は中田と北沢にも出場して欲しかったらしいですけれども、結局それは断られたらしいです。これは要するに大会とは関係なしに、ソニーが自分たちのスポンサー活動としてやっているものです。

牛木：このソニーの大会というのは、3年目なんですね。たまたまコンフェデの大会にぶつけたの？

田村：わざとですね。決勝は12月4日か5日ですから、ワールドカップの抽選会に合わせて決勝が行われます。

徳田：決勝の次の日に行ったら、全部取っ払われてなかったです。

田村：コンフェデの決勝に合わせてこの大会は始めたみたいな感じでした。(ネルソン・マンデラ・スクエアの画像を見ながら) これはネルソン・マンデラの銅像ですが、広場があって、レストランがあって、フットサルの臨時コートにしていた。場所はサントンというところで、ヨハネスブルグの郊外です。僕らの泊まったメディアホテルがこのすぐ隣にあって、FIFAも近くのインターコンチ(ネンタル・サントン・タワーズ)に泊まっていた。

河野：レンタカーで移動されたと聞いたんですけども、ヨハネスの街中は走っても大丈夫な感じですか？

田村：僕らは危ない所を通っていません。

河野：よくテレビで止まった車に強盗がというのを見るんですけど。

田村：あれは多分本当だと思いますよ。全部が全部あだとは思わないけれども、多分ああいうところは絶対あると思います。僕らは行ってないし、近づかなかつたし、市の中心街は通らなかつた。道に迷ったら危険だと思いますね。もちろん地図やナビはありますけれども。高速バスは比較的安全だと言われています。それで僕も乗ってみようと思ったんですけども、バス・ステーションがヨハネスブルグの中央駅とかになっているんです。バスが来るまで待たなければいけないので、ちょっと交通手段としてはどうかなと思いました。

牛木：田村さんは、これは今自分の経験で責任は持たないと一番初めにおっしゃっていた。レンタカーの問題でも僕はここまで何遍も聞いているんだけど、レンタカーが危ないという説もあるんですよ。それは去年南アに行って来た木崎伸也さんの本にも書いてある。木崎さんはやっぱりレンタカーを借りて行ったんだけど、本当はそれが一番危ないんだというのもあるって、どれが本当

かわからない。タクシーも、これは田村さんも言っていたけれども、メーターのタクシーが危ないらしい。それから先程の白人と黒人の話で、黒人でも段々裕福なのが出て来て、旧白人地区にも黒人が豪邸を構えているというのがある。これは僕らの仲間が去年南アに行った時の話なんだけれども、そういうところの通りが一番歩いていると危ないらしい。何故かという、みんなそれぞれの家にガードマンが鉄砲を持っているから、襲われて逃げても、逃げ込んだら怪しい奴だと撃たれてしまうから逃げられない。いろいろな説があるけれども、僕はインフルエンザよりはずっと安全だろうと思っている（笑）。

高橋：田村さん、どうもありがとうございました。